

## 中国の書籍流通と貸本屋（二）

村 上 公 一

### はじめに

前稿では禁書史料を基に、貸本・貸本屋の歴史的な流れのおおよそを把握することを試みた。それによれば貸本屋についての最初の記録は康熙二十六年の劉楷の上奏文に見え、法令に正式に登場するのが乾隆三年。その後嘉慶・道光年間には貸本屋は全国的に広く流行するに至る<sup>1)</sup>。

本稿では、より具体的な史料を基に貸本屋の経営の実際について見ていく。しかし道光以前の状況については具体的な史料が不足しているため、記述は光緒以後の状況に偏る。

貸本・貸本屋は中国でも清代から民国にかけて社会史的にも文学史的にも大きな意味を持つ存在だと考えるが、これまで研究の組上に載せられたことが無い。前稿と併せて問題提起となれば幸いである。

### 一 嘉慶年間 福州 —— 唱本の貸本と女性読者 ——

初めに、鄭振鐸、關德棟等の記述によって福州一帯で流行していた

中国の書籍流通と貸本屋（二）（村上）

た評話（彈詞の一種）の貸本による流通について見ることにする。

福州で最も流行していた説唱は「評話」と言い、やはり彈詞の異称である。文中に方言が多く混ざっている。しかし多くは鈔本であり印刷されたものは非常に少ない。閩閩中の女性たちはしばしばこれら「評話」を専門に貸し出している店に行き借りて読んだ。（鄭振鐸『中國俗文學史』<sup>2)</sup>）

これらの作品の伝写本は当時町の中で非常に流行した。中上層社会の中で些か文化を備えた女性達は貸本を借りて読むことを喜んだだけでなく、借りて読んで書き写すことも喜んだ。これは封建社会に於ける知的女性達が心の空しさをうずめ煩悶を晴らす一つの方法であった。これらの作品から見れば更にはつきりと判る。……

『晉陽外史』残存五卷には、卷末にいずれも書き写した年月が記されている。卷一には「己巳十二月十一日抄成」、卷二には「庚午二月廿七日抄完」、卷三には「己巳十一月十二日抄終」、

巻四には「己巳十一月廿八日抄」、巻五には「庚午二月初三抄完」と記されている。鈔本の紙質は極めて古く、多分清中葉の旧鈔本である。己巳は嘉慶十四年、西暦一八〇九年に、庚午は嘉慶十五年、西暦一八一〇年に当たる。書き写した順序は巻三、巻四、巻一、巻五、巻二の順。これは貸本の貸し借りから、書き写すときには先に借りたものを先に写し、本来先にあった部分でも後から借りると後から写すしかなかったことを明らかに示している。各巻の書き写された時間は十五日から二十五日離れていて等しくなく、決して職業的な書き手によるものではなく、女性が家庭の暇な時間を利用して書き写していったものであることが判る。(關徳棟「李桂玉的『榴花夢』」)

以上の記述はいずれも福州に於ける評話の貸本についてのものだが、要点を箇条書きにすると以下のようになる。

- 一、評話を専門的に貸し出す貸本屋が存在した。
- 二、評話の貸本の多くは鈔本である。
- 三、評話の貸本読書の中心は女性達である。
- 四、借りた本を抄写する読者がいた。
- 五、貸出期間は少なくとも十五日から二十五日はある。

鄭振鐸が何を根拠に貸本屋の存在を説いているのか明示されてな

いのが残念である。福州の風俗関係の史料を注意深く調査すれば貸本屋についての記述が見つかるのかも知れない。ただ江蘇・浙江の禁書史料に唱本（おそらくは彈詞）の貸本の存在が記されていることや、後に述べるように光緒年間に北京で鼓詞の貸本が盛んに行われていたことから考えると、この時期に福州で評話の貸本が行われていたと推測するのは極めて妥当なことである<sup>①</sup>。

また評話の貸本の享受者は女性が中心であったようだが、そもそも評話を含めて広く彈詞そのものが、作者―読者或いは作者―演者―聴衆の全てにわたり、主に女性によって支えられていた。書場・書寓或いは家庭や路上で職業的な女彈詞（女浪曲師）によって唄われていた他に、家庭で良家の子女に読まれ時には家族に唄い語られるという享受の仕方もあったことがわかる。

借りた本を抄写することについては、『評彈通考』に引く「談『榴花夢傳奇』」（『新民晚報』に原載）によれば、道光・咸豐年間に福建では結婚する前の少女が彈詞などの書物を書き写しておき、花嫁道具として嫁ぎ先にもって行く風習があったとし、当時発見された『榴花夢』鈔本も花嫁道具だと推測している<sup>②</sup>。先の『晉陽外史』も同様のものかも知れない。

また宗教的色彩の強い書物、例えば仏教の經典や善書、宝巻の類の自発的な出版や無償の配布または抄写は信仰の一部としてかなり広く行われていた。本来宗教とは切り離されている彈詞の抄写も基本的にはこれらと同質の発想を根に持っていたのではなからうか。

ともかくも比較的早い時期の唱本の貸本とそれを支える女性読者達の姿を確認することができる。

## 二 光緒年間 北京 —— 副業としての貸本屋 ——

光緒年間まで北京の饅頭舗は副業として貸本業を営んでいた。李家瑞、傅惜華等に記述がある。はじめに李家瑞の「清代北京饅頭舗租賃唱本概説」を簡略に訳出する。

北京の饅頭舗は光緒三十四年まで副業として貸本業を営んでいた。中央研究院が収集した四五十種の鼓詞鈔本は全て饅頭舗から出たものである。これらは皆大部なものであり、『三國志鼓詞』のように全百七十三冊、百六十万字余りの大作もある。一冊の大きさは縦二六センチ・横十二センチの縦長の小冊子。一冊の枚数は一定の時間で読み終えるように全て二十枚から三十枚の範囲で作られている。表紙に長方形の印記があるが、今二例を挙げる。

### 一、永隆齋鈔本『福壽緣鼓詞』

本齋は四大奇書・古詞野史を貸し出す。一日毎に交換。半月交換しなければ保証金で穴埋め。親友御免。本を破る者は男は盗人女は娼婦。当店は交道口の南路東にあるのがそれ。(本齋出賃四大奇書、古詞野史、一日一換、如半月不換、押賬變爲價本、親友莫怪。撕書者男盜女娼。本舗在交道南

路東便是。)

### 二、興隆齋鈔本『大晉中興鼓詞』

本齋は鈔本の公案を貸し出す。以下のこと言明。一日毎に交換。半月交換しなければ保証金で穴埋め。一月交換しなければ日数に応じて追加金。もし借り出した本で子供をあやしたり、本の表紙を破ったり、綴じ糸をばらしたり、紙を破って使ったり、勝手に文字を書き加えたり、絵を書いたり、文字を改めたりする者は、男は盗人女は娼婦、妓女の子。君子御免。(本齋出賃抄本公案。言明一天一換、如半月不換、押賬作本、一月不換、按天加錢。如有賃去將書哄孩、撕去書皮、撕去書編、撕紙使用、胡寫胡畫、胡改字者、是男盜女娼、妓女之子、君子莫怪。)

ここから貸本の手順がわかる。まず幾らかの保証金を払った後で一冊を借りる。一日で読み終え翌日二冊目と交換する。半月交換に来なければ保証金は没収される。一月交換しに来なければ更に日数に応じて追加金を取られることになる。一冊毎の貸本代は三美齋の「天賜福」によれば光緒元年には九文であった。また聚文齋鈔本『三國志鼓詞』の印記に「一冊なくしたら一吊賠償。」とある。北京の俗語では一吊は百文に当たるので、一冊毎の制作費は百文、保証金も百文前後であることがわかる。例外として三美齋の「貸し出し二日で交換。」や鴻吉記の「一日毎に交換。遅れたら罰金。」聚文齋の「一日毎に交換。五日

遅れたら罰金。」がある。貸本代はどこでも五日ごとに支払うことになっているが、北京の旅館業の五日清算の例に倣ったのであろう。

先に記されている店舗名が消され、別の店舗名が記されているものもあるが、興隆齋の本の印記に「同業で当店の本を貸し出して別に貸すものは、男は盗人女は娼婦。」とあることから、別の店の本を借り出して人に貸してしまったものであることがわかる。

以下に各饅頭舗の店舗名、住所及び貸し出していた本とそこに記されている年代を一覧表にする。

| 書舗名 | 所在地       | 貸本書名                 | 年代                  |
|-----|-----------|----------------------|---------------------|
| 永隆齋 | 交道口南邊路東   | 三國志 隆慶昇平<br>福壽緣 濟公傳  | 光緒甲申(十年)<br>又光緒二十一年 |
|     |           | 和北番 鋒劍春秋<br>拾粒金丹 桃花記 |                     |
|     |           | 龍鳳忠勇 吳越春秋            |                     |
| 永和齋 | 八條胡同西口外路西 | 三國志 隆慶昇平<br>濟公傳 和北番  | 光緒十一年               |
|     |           | 鋒劍春秋 拾粒金丹<br>桃花記 雙官語 |                     |
| 興隆齋 | 施家胡同東口    | 大晉中興 五岳掃北<br>兌州府 天貴圖 | 同治八年<br>又光緒六年       |
|     |           | 碧玉環 雙仙緣              | 又光緒三十四年             |

集雅齋 東直門内大街藥 鋒劍春秋 回龍傳 同治元年

王廟對過 走馬

隆福齋 東四牌樓隆福寺 三國志 濟公傳

神路街路東

吉巧齋 北新橋南 三國志

聚文齋 安定門内姑姑寺 三國志

胡同廟内

鴻吉號 東安門内 桃花記

保安堂 崇文門内東單牌 吳越春秋

樓□□羊市路東

天順齋 護國寺西口外路 雙官語

西

崔記 八面槽 西唐

三美齋 天賜福

光緒三年

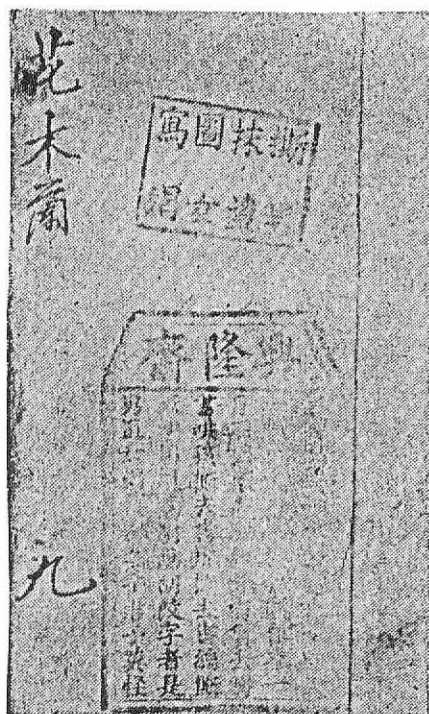
『三國志』を貸し出しているのが五軒、『濟公傳』『鋒劍春秋』がそれぞれ三軒で、これらの本が人々に最も喜ばれていたのがわかる。『天貴圖』『碧玉環』『雙仙緣』『天賜福』以外は全て鼓詞である。<sup>6)</sup>

傅惜華の「清季北京租賃小説唱本——大本書封面」は饅頭舗で貸し出されていた鼓詞鈔本の表紙の写真である。(図一)  
興隆齋の『花木蘭鼓詞』鈔本第九冊。左上に「花木蘭」下に「九」と書かれている。上部の小さな印記にはこうある。

本齋出賃抄本公案。言明一天一換、如半月不換、押賬作本、一月不換、按天加錢。如有賃去將書哄孩、撕去書皮、撕去書編、撕紙使用、胡寫胡畫、胡改字者、是男盜女娼、妓女之子、君子莫怪。

下部の大きな印記は上に「興隆齋」と大きく横書きされ、その下にはこうある。

撕抹圖寫、男盜女娼。（破ったり汚したり絵や字を書く者は、男は盗人女は娼婦。）



(図一)

これは李家瑞が例として挙げた『大晉中興鼓詞』（同じく興隆齋の鈔本）の印記と全く同じものである。

傅惜華の解説によるとこれらの鼓詞鈔本は俗に「大本書」と呼ばれていたと言う。

これも要点を箇条書にする。

- 一、饅頭舗が副業として俗に「大本書」と呼ばれる鼓詞鈔本の貸本業を営んでいた。
- 二、保証金は百文。貸本代は一冊九文、五日毎に支払う。
- 三、一日毎に一冊交換する。
- 四、大きさは縦二十六センチ横十二センチ、二十葉から三十葉の小冊子。（何十冊にも及ぶ長編が多い）
- 五、武俠系の章回小説を題材とするものが多い。

貸本が副業として営業されることは洋の東西を問わず普遍的なものであった。例えばイギリスでは百貨店のハロッズ、薬屋のブーツ等が貸本業を営んでおり、日本でも二十年程前までは駄菓子屋が貸本を置いているのをよく見かけた。それぞれの本業が貸本の顧客筋をほぼ決定付けるわけだが、饅頭舗という本業からすると中下層の市民が読者の中心を占めていたと推測される。同じく李家瑞の『北平風俗類徴』によると、町のおばあさん達が好んで借りていたように、先の評話の例と同様、ここでも貸本読者として女性の姿が浮か

び上がる。その流行の様は、貧乏で保証金を払えないので身に付けていた耳飾りを保証金代わりに置いて借りて行く人もいる程だと言<sup>8</sup>う。また江南の田舎で「小郎兒曲」などの鈔本も取り扱っていた「星貨鋪」と呼ばれる雑貨屋でもそれらの鈔本を貸本として取り扱っていた可能性が高い<sup>9</sup>。

ところで『評彈通考』に引く「一九三三年間的古籍發現 八」(『中國文學研究』第六卷に原載)にも、貸本に供されていた鼓詞鈔本についての記述がある。

今年買い入れたのは、(一)『呼家將』九十四冊、(二)『大明興隆傳』百二冊、(三)『亂柴溝』十六冊(不全)、(四)『柴金鐸』十冊、(五)『珍珠塔』四冊、(六)『千金全德』四冊、(七)『斬豆娥』六冊(末尾に欠文有り)、(八)『雙燈記』八冊。表紙は皆何枚か重ねた厚紙でできており、一冊毎に貸本屋の広告が記されている。例えばその一つにこうある。「本の交換は一日毎三日交換しに來なければ本齋は保証金で穴埋め。君子御免。

(調每本一天一換。三日不到、本齋即將押賬便本。君子莫怪。)」また一つに、「本齋は四大奇書・抄本公案・今古奇觀・古詞野史を貸し出す。北溝沿揀果廠中間小胡同北路北頂頭門に開設。慶豐齋。(本齋出賃四大奇書、抄本公案、今古奇觀、古詞野史、開設在北溝沿揀果廠中間小胡同北路北頂頭門。慶豐齋。)」

ここに当時鼓詞小説が社会で流通していた状況を見ることが

できる。とすれば刻本もやはり普通このように流通していたのである。いま前門外打磨廠にある老二西堂は現存する最古の貸本屋である<sup>10</sup>。

ここで述べられている鼓詞鈔本は広告文が先に挙げたものと極めて類似していることから李家瑞等の言う饅頭舗で扱われていたものと同種のものだと思われる。しかし慶豐齋の名と鼓詞の書名は全て先の表に記されていないものである。

ここで更に注目されるのは鈔本と同様に刻本も貸本として流通していたとし、老二西堂の名を挙げていることである。打磨廠の老二西堂については『琉璃廠小志』に次のように記されている。

打磨廠には老二西堂、寶文堂等の書店があり、専ら小唱本や曆書として私塾で使うための旧式の啓蒙書を印刷し、印刷と販売を同時に行い、華北各地の都市や村で売り出していた<sup>11</sup>。

これによると老二西堂は貸本専門の本屋ではなく、書物の出版から販売まで一手に引き受けていたことがわかる。更に華北各地に販売網が有ったということは、同じように貸本網も有ったと考えて良からう。

現存する最古の貸本屋とされるが、打磨廠の老二西堂は恐らくは同治或いは光緒の頃開設された書店であり、必ずしも古いものでは

ない。明代から続いていたと言われる琉璃廠の老二酉堂と混同しているのかも知れない。<sup>(12)</sup>

### 三 民国初年 上海 —— 小間物屋スタイルの貸本屋 ——

近人張靜蘆の自伝によれば民国初年当時上海で造り酒屋の徒弟をしていた著者は日々貸本を読んでた。以下その自伝によつて民国初年の負販（小間物屋スタイル）の貸本屋の状況について述べる。

上海にいたのはたった一年と三ヶ月に過ぎなかったが、私は私を徒弟にしてくれた造り酒屋に感謝しなければならぬ。この一年間、私が苦悶と辛勞の生活を和ませる唯一の慰めは「小書」を読むことだった。包みを背負った本屋が店にやってくる。彼は専ら貸本の商売をしており、一部につき二三個の銅錢を払えば、すぐに満足するまで読ませてくれる。短いものは三日で取り替え、長いものは一月半でも借りたままにできる。「小書」は現在の一折八扣の標点本と同様にどんな本でもあった。言うまでもなく小説や筆記が幾らか多かったが。

この「小書」によつて私は別世界へ引きずり込まれたのだ。徒弟をしている間はお金にならない。夜は遅く朝は早く、丸まる十四時間働かされる。明るいうちは落ち着いて本を読めるようなままとまった時間はないが、真夜中、人が寝静まるのを待

って、古新聞で電灯の傘に覆いをすれば、長くても短くても自由に読め、眼が開けられなくなった時に止めれば良いようになった。この一年で私は有るだけの演義や彈詞そして閨微草堂等の一連の筆記をきっかりと読み終えた。<sup>(13)</sup>

これも要点を箇条書にする。

- 一、小間物屋スタイル（負販）の貸本屋が存在した。
- 二、見料は一部につき二三分。
- 三、貸出期間は三日から一ヵ月半と融通がきいた。
- 四、小説（演義彈詞）筆記を中心に全ての種類の本を扱っていた。

小間物屋スタイルの本屋については古くは宋人釋惠洪の『冷齋夜話』に見える。

余嘗て州南の客邸に館る。所謂嘗（常）賣なる者を見る。破篋中に詩編寫本有り。<sup>(14)</sup>

この「嘗（常）売」は明らかに書物を扱っているが、この語は必ずしも本屋を指したのではない。『雲麓漫鈔』には以下のように記されている。

朱勳の父朱冲なる者、呉中の常賣人なり。方言に、微細物を以て博く郷市中に易ふ。自ら唱して曰く常賣と。<sup>15</sup>

つまり「常売」とは小間物屋の総称であり、その小間物屋の中に書物を扱うものもいたということであろう。

清代から民国にかけてこの種の小間物屋スタイルの本屋が活躍する。『北平風俗類徴』では数カ所にその記述がみられる。その一つ「大夏晚报」からの引用をここに挙げる。

所謂流浪江湖の書買は多く身に小箱を背し、街中を穿行す。年關に至り兼營して「曆書」を販賣す。故に平人多く之を呼びて「賣憲書的（曆売り）」と爲す。出售する所の書籍は多く封神演義・劉公案等の小説に屬す。間に亦た古文觀止・東萊博議等の古文の讀本有り。是の書多く來たるに上海の蔽舊書店の廣益書局・掃葉山房の如きよりす。其の板本多く光紙銅版印刷たり。字極めて小なり。兒童多く喜びて其の小説を購読す。之に因りて目力深く其の害を受く。一折八扣書の出づるより、此の輩の營業之が爲に一跌す。<sup>16</sup>

本箱を背負い街中を売り歩く本屋は年末には曆も売ることから「曆売り」と呼ばれていたようだが、ここで扱われている書籍は小説が大部分を占めている。蠟紙に銅板で印刷され、文字が小さく見

辛いものだった。主な読者として子供を挙げているのが興味深い。記述によればこの種の本屋は一折八扣本の出現によって衰退していく。一折八扣本の出現、つまり書籍の大量供給と大幅廉化は固定の大型の本屋を利することになり、結果として流動の小型の本屋を駆逐することになった。<sup>17</sup>

この「曆売り」が貸本屋を兼ねていた、あるいは貸本を中心とする「曆売り」が存在したことは想像に難くない。また一折八扣本が「曆売り」の供給する書物に取って代わったことは、張靜蘆が「小書」を一折八扣本に擬えていることと一致する。<sup>18</sup>

料金については保証金についての記述がなく、また貸本代の記述も「二三個の銅錢」と曖昧だが、この一般的な都市労働者の元を直接訪問する貸本屋の存在は貸本読者層の広がりを見せざるを得ない。またあらゆる種類の本が揃っていたようであり、今まで見てきたような唱本中心の貸本屋から小説、筆記類中心の貸本屋に変化してきているようだ。読者の要求が質的な変化をもたらしたと考えられ、貸本読者の成長と、貸本屋の成長をここに見ることができる。

#### 四 一九四〇年代以前 開封 —— 常設の貸本屋 ——

一九四〇年代以前の開封に於ける常設の貸本屋について韓徳三の記述によって述べる。

四十年代以前の相国寺の裏脇門には数軒の小さな露天の本屋



があり、小さなサイズの唱本、俗に言う「小唱本」を並べていた。『雷公子投親』『紅燈記賣愛姐』『秦雪梅吊孝』『二度梅』『空城計』『朱買臣休妻』『胡延慶打擂』『打蜚船』『小二姐做梦』等があった。この他にも『三字經』『百家姓』『千字文』『萬事不求人』『萬全雜字』『千家詩』『笑林廣記』『玉匣記』等もあったが、これらの本は大体が三十二枚切りの本で、薄灰黄色の薄紙か白い麻紙に、宋朝体の木刻印刷で、文字はくつきりとし、頁数は多くなかった。

相国寺の中には他にも数軒の小さな本屋があった。大体は一間間口で、奥と外の二部屋に分け、奥の部屋は倉庫にし、外の部屋には本棚を一つ置いて本を並べ、門の外では露天で本を並べていた。売っているのは、張恨水の『春明外史』『啼笑姻緣』、李涵秋の『廣陵潮』、沈枕亞の『玉梨魂』や、石印小字本の『儒林外史』『西廂記』『今古奇觀』『綠野仙踪』『秋水軒尺牘』『唐詩三百首』の類だった。同時に小説の貸し出しも行っていた。『紅樓夢』『三國演義』『水滸』『聊齋志異』『七俠五義』『福爾摩斯（ホームズ）偵探小説』、更には張恨水の大部分の小説といった類である。本の値段に照らして保証金と貸本代を取っていた。毎日、小説を借りる人の方が買う人より多かった。また時には縁日に地面に「小唱本」を並べて売る露店も見かけた。

これも要点を箇条書にする。

中国の書籍流通と貸本屋（二）（村上）

- 一、常設の貸本屋が存在した。
- 二、書物の販売と貸出を同時に行っていた。
- 三、書物の名前が列挙してある。伝統的な白話小説と翻訳小説、通俗小説の類。

普通の本屋が立ち並ぶ中に貸本屋があり、また一つの本屋が販売と貸出の両方を行っている。『春明外史』『啼笑姻緣』『廣陵潮』『玉梨魂』『儒林外史』『西廂記』『今古奇觀』『綠野仙踪』『秋水軒尺牘』『唐詩三百首』を販売書物の例として挙げ、『紅樓夢』『三國演義』『水滸』『聊齋志異』『七俠五義』『福爾摩斯偵探小説』と張恨水の小説を貸出書物の例として区別して挙げているが、例の内容に重複もあり、実際には同一のものを販売もし貸出もしていたようだ。このように一つの場所で書物を買うこともできれば借りることもできるといふ状況は、一つの場所に幅広い階層の顧客を期待することができたわけで、読者獲得の便法とも言える。

またそこに挙げられた書名から通俗小説、特に張恨水に代表される鴛鴦胡蝶派小説の流行に果たした貸本屋の役割を改めて認識させられると同時に貸本の内容が唱本から小説へと完全に変化していることに気づく。

## 五 現在の貸本屋 —— 書攤と書亭 ——

現在の中国に於いても貸本屋は到る所で見ることができる。現在

の貸本屋はおおよそ書攤形式のものと書亭形式のもの二種類に分類できる。

書攤形式の貸本屋では基本的には書物の貸出はしない。客は一定の見料(数分)を払えば何時間でも本を借りて読むことができる。置かれている書物は連環画(漫画・劇画)と雑誌が中心で、稀に一般の書物主に小説が置かれている所もある。当然ながら読者の多くは子供達である。

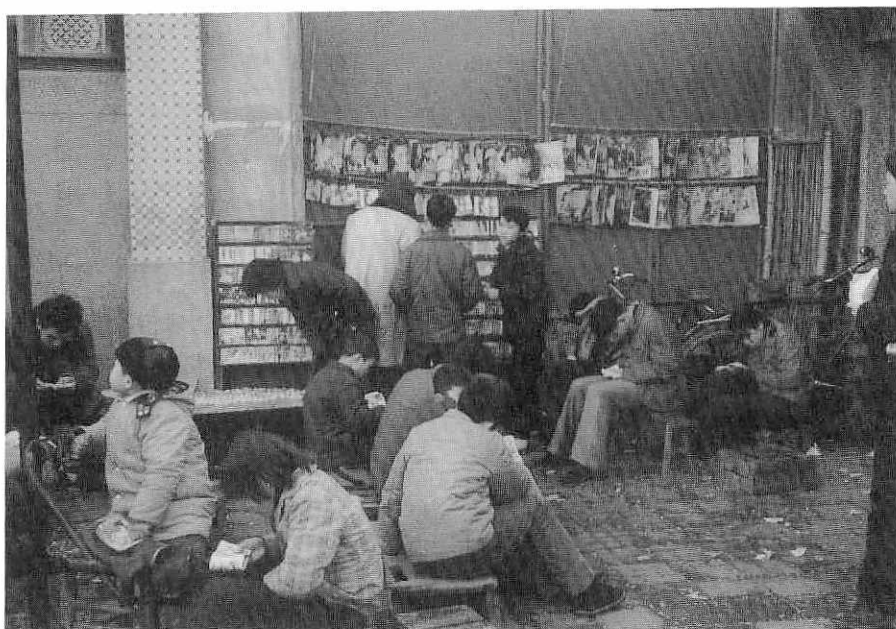
設置場所は人のよく集まる所、たとえば商店街の角、新聞・画報の掲示板の前、映画館・劇場の前などが一般的である。少し斜めに傾いた、雑誌立ての様な本棚が数個置かれ、そこには連環画が並べられている。雑誌は街路樹と街路樹あるいは建物との間に張られた紐からクリップで吊されている。小説類は台の上あるいは箱の中に積まれている。店番は老人であることが多い。長椅子がいくつか置いてあり、客はお金を店番に払った後、好きな本を取ってきてそれに腰掛けて読む。殆どの書攤は以上のような形を取っている。(図二)このような連環画を中心とした書攤は解放前から続いているもののように、民国二十一年(一九三二)に茅盾の著した「連環圖畫小説」には次のように記されている。

上海の大道りや横丁には無数の小さな書攤がまるで歩哨のうにびっしりと並んでいる。書攤とは言っても、その実はただ二枚の塀にもたせ掛けた特製の板に、様々な書名の版式の同じ

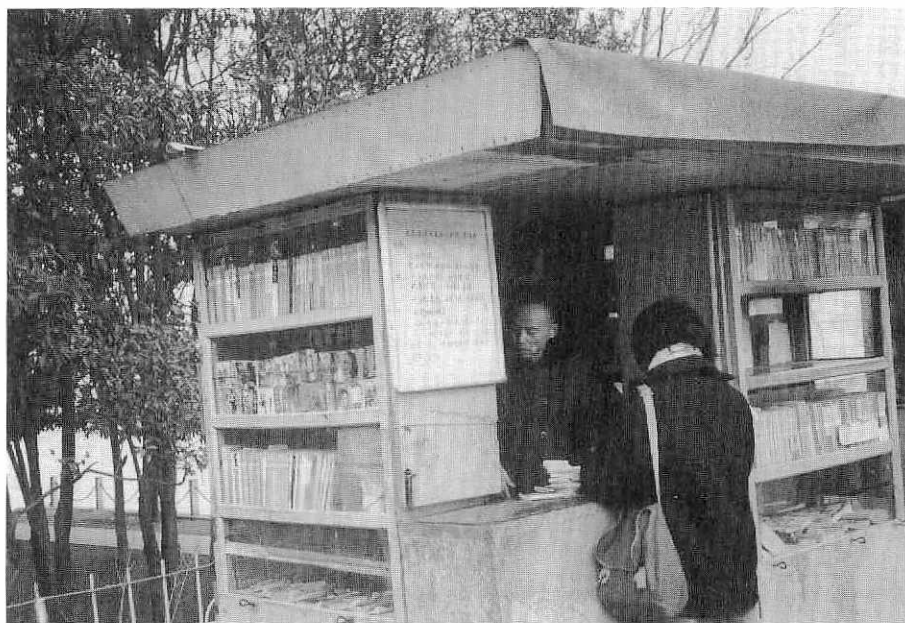
小型の本があたかも膏藥のようにびっしりと列べられているだけのものである。この「書攤」——もし我々もそれを書攤と呼ぶのなら——の傍らには更に長椅子が一つ置かれている。二個の銅銭を払えば誰でもその長椅子に腰掛けて店に並べである小本を二十冊でも三十冊でも借りて読むことができる。もしあなたが手練な人ならばあるいは四十冊五十冊読めるかも知れず、決まっていはいない。

これらの小本は所謂連環圖画小説である。これらの小さな書攤はいつの間にか上海の大衆が最も歓迎する生きた図書館となり、同時に最も効果的で且つ普遍的な「民衆教育」の手段でもあるのだ。

ここに描かれた書攤は現代のそれと寸分の違いもない。この後で茅盾は「連環圖画小説」つまり連環画の形式と内容を説明しているが、これも現代の連環画と変わりはない。それによれば、形式は一頁の六分の五程度の図画と残りの部分に施された説明文(多くは図画の上部)からなり、一冊二十頁で、たとえば『水滸傳(七十回本)』なら一回一冊、全七十冊となる。また内容は三つに分類される。まず『水滸傳』『封神演義』などの神怪や武俠の旧小説、これが最も多い。次に『火焼紅蓮寺』などの映画もの。最後に『蒋介石北伐』などの時事もの、普通の書攤では需要がならしくほとんど置かれていない。更に書攤が『時事蘇灘』『時事五更調』といった唱本中



(図二)



(図三)

心から連環画中心に変わったことを読者の閲読能力の進歩と結び付けて、連環画の有用性を説いている。

この矛盾の記述で注目されるのは、連環画の登場によって唱本が通俗読物の主役の座を逐われたことである。旧小説、芝居(映画)、時事といったかつて唱本が題材としていたものを連環画は題材としていることがわかる。現代では書攤で唱本を見かけることはない。

次に書亭形式の貸本屋について述べる。書攤と較べるとその数は少ない。書物を販売している普通の書亭と外見上は殆ど区別が無い。移動式のものもあり有る。書攤とは違ってその場で読むことはなく家に持ち帰って読む。貸本は小説が中心だが、連環画や雑誌も置かれている。図三は筆者が一九八四年に寧波で見かけた書亭形式の貸本屋だが、正面に掲示されている貸出規則が興味深いので以下に記す。

本亭用以下挙出的方式为读者服务。

#### 借閱方法

凭工作証・工会証・学生証等有效证件或現金貳元、即可借閱。

収費标准(以一本为单位)

小说・杂志二分一天、以天计算。

収費日期规定

当天借閱——第二天1点以前还、算一天。当天借閱——第二

天1点以后再还、算两天。连续还借、过1点以后为隔天算。

本亭は以下に示す方式で読者に奉仕する。

#### 借閱方法

工作証・工会証・学生証等、効力のある身分証明証、または現金二元により、直ちに借閱することができる。

料金の基準(一冊を単位とする)

小説・雑誌、一日一分。一日単位で計算する。

#### 料金の日数計算の規定

当日借閱して——翌日一時以前に返せば一日として計算する。当日借閱して——翌日一時以後に返せば二日として計算する。

連続して借りた場合は一時以後は一日過ぎたものとして計算する。

身分保証のはっきりしている現代では保証金よりも身分証明証の方が重視されているようである。保証金二元は、一九七〇年代後半に出版された『水滸』(人民文学出版社 二冊本)の定価が二元、『水滸傳』(同 三冊本)が三元からすると長編の小説一部、あるいは数百頁の小説二冊程度の金額に当たる。一日一冊一分の貸本代はかなり安価なものと思われる。ただ連環画が一冊につき一分というのは書攤と較べて割高なので、別の計算方法があるのかも知れない。(図の少女は連環画を借りている。)

これらの書攤・書亭は大都市よりも地方都市にその姿を見かける

ことが多い。これは地方都市では、市民の読書欲求を充たすだけの書店や図書館が充実していないことが大きな原因と思われる。特に書攤はどんな田舎に行っても町らしい所では必ずこれを見かけた。現代でも中国の子供にとって書攤で連環画を読むことは最も大きな娯楽の一つであるようだ。茅盾の言う「生きた図書館」は今でもその機能を果たしている。

### おわりに

以上嘉慶から現代までの各地の貸本の状況を見てきたが、大きな流れとして次のことが確認できる。嘉慶より前の具体的な史料を挙げるのが出来なかったためそれ以前のことは定かではないが、比較的早い時期の貸本は唱本の鈔本が中心であったようだ。光緒年間の北京の饅頭舗での副業としての鼓詞鈔本の貸本の隆盛はその頂点である。その後唱本鈔本は連環画にその座を取って代わられることになる。一方でより高等なものを求める貸本読者は通俗小説に走るようになる。この時点で貸本は、幼年或いは閲読能力の比較的低い層に読まれる連環画と青年或いは閲読能力の比較的高い層に読まれる通俗小説とに二分化される。書攤と書亭はこの二分が現在まで続いていることを示している。

早期の貸本が鈔本に限定されるのは、書籍の出版部数が少なく価格も高かったことと無縁ではあるまい。書籍が貴重品であればあるほど貸本の料金特に保証金は高くなる。貸し出した貸本の原価を保

証金として取るとしたらかなり高いものとなり、貸本屋の顧客の中心をなす中下層の識字層には手が出せない。そこで工賃の安い鈔本が貸本として流通したのではないかと思われる。清末民初の出版革命による書籍の廉価化によってはじめて印刷された書物が貸本の中心を占めるようになったのである。

非常に荒っぽい図式化だが、貸本のおおよその流れは以上のようにだと考える。

本稿の目的は貸本・貸本屋の具体的な姿に迫ることだったが、結果的には史料の羅列に終始してしまった。史料の不足もあり、全体としての貸本・貸本屋像を構築するのは今後の課題としたい。また貸本・貸本屋の社会史的、文学史的意味についても稿を改めて論じることにする。

### 注

- (1) 「中国の書籍流通と貸本屋——禁書史料から——」(『山下龍二教授退官記念中国学論集』研文社一九九〇 所収)
  - (2) 第十二章「彈詞」(商務印書館一九三八 上海書店影印)
  - (3) 『曲藝論集』(上海古籍出版社一九五八) 所収。
  - (4) 禁書史料中の貸本・貸本屋については拙論(注1)を参照。
  - (5) 譚正璧・譚尋菟輯『評彈通考』卷四 彈詞(中)「榴花夢」三二(中国曲藝出版社一九八五)
  - (6) 王秋桂編『李家瑞先生通俗文学論集』(台灣學生書局一九八七)
- ・張靜蘆編『中國出版史料補編』(中華書局一九五七) 所収。

- (7) 張靜蘆編『中國近代出版史料二編』(中華書局一九五四)所収。
- (8) 『北平風俗類徵』市肆「蒸鍋舖」(商務印書館一九三七上海文藝出版社影印)。
- (9) 「星貨舖」が唱本を販売していたことについては、李斗『揚州畫舫錄』卷十一に記述がある。
- (10) 『評彈通考』卷六 評論「論『鼓詞』三」
- (11) 張涵銳「北京琉璃廠書肆晚乘」(孫殿起輯『琉璃廠小史』第一章に所収。北京古籍出版社一九八二)
- (12) 前掲書第三章所収の「琉璃廠書肆三記」は清末民初の北京の書店を一覧にしたものだが、付録の「降福寺及びその他」の部分に「老二西堂 陳□□、字蔭堂、東鹿縣人。」とある。住所は記されていないが直前の文成堂が「打磨廠路南」とあることから打磨廠であろう。また清末民初の書店の師弟の譜牒を整理した「販書傳薪錄」(同書第四章)には「老二西堂 陳瓌賢、東鹿縣人。弟人 王振清(潔忱、東鹿縣人)」とある。弟子が一人しか記されていないことから比較的小規模の書店であることがわかる。
- ところで老二西堂は琉璃廠にも有り、こちらは「琉璃廠治革考」(同書第一章)によれば明代から清代まで続いた規模の大きな書店であり、乾隆年間の見聞を記した李文藻の「琉璃廠書肆記」(同書第三章)には二西堂の名が見え、「或いは二西堂は先の明代から有り、これを老二西と言ふ」とある。この二西堂或いは老二西堂が同一であるかはさて置き、琉璃廠ではこの名を持つ書店が清末民初の間に消えてしまったようだ。また先の「琉璃廠書肆三記」には老二西堂のすぐ後に「二西堂 饒□□、字丹壑、江西人、於光緒□年開設、經營十餘年歇。」とある。この二西堂も琉璃廠以外の書店であり、しかも光緒年間に開設され十数年で店を畳んでいる。他に同名の書店はない。
- 老二西堂の出版した書物は「記廠肆坊刊本書籍」(同書第三章)に『四書章句』(同治十三年)『說岳全傳八卷八十回』(光緒八年)の二種が挙げられ、また『小説書坊錄』(韓錫鐸・王清原編纂、春風文藝出版社一九八七)には『濟顛大師醉菩提全傳二十回』(光緒六年)『增訂精忠演義全傳八卷六十回』(光緒八年)『三俠五義二十四卷百二十回』(光緒九年)の三種が載せられている。『四書章句』を除けば全てが章回小説で時期も光緒六年から九年に集まっている。老二西堂については稿を改めて詳しく論じる。
- (13) 『在出版界二十年』五「不長進的孩子」(上海雜誌公司一九三八上海書店影印)
- (14) 『冷齋夜話』卷二「古樂府前輩多用其句」(學津討原本)
- (15) 『雲麓漫鈔』卷七「涉聞梓舊」本
- (16) 『北平風俗類徵』職業「書賣」の項に記述がある。
- 一 頒曆(十月)」、職業の「賣書」の項に記述がある。
- (17) 一折八扣本とは民国二十年代に上海の新文化書社や廣益書局を中心に発行された超値引き廉価本のこと。定価の一折つまり一割に引き、更に八扣つまり八割に引きくので結局定価の八分の値段になる。初期は標点符号が付けられた本で、値引き率は低かったが次第に標点符号を取り除く一方で挿画を充実させた本に変わって行き、値引き率も高くなった、一折八扣本については、平襟亞「上海灘上の「一折八扣書」」(『出版史料一』學林出版社一九八二)に詳しい。
- (18) 「小書」は石印小字本のことであろう。清末から民初にかけて上海では石印出版社が林立していた。「大夏晚報」の「銅版印刷」本も、書店の例として挙げられている廣益書局や掃葉山房がいずれも上海の石印出版の中心的存在であった時期があることから、ひょっとしたら石印小字本の誤りで、どちらも同じ本のことを言う

ているのかも知れない。また近眼との関係についても包天笑の『鉤影樓回憶錄』によれば、彼自身を含め当時の近眼の原因の殆どは上海の石印小字本にあったという。

(19)

韓德三「梁園絮語」の「書業春秋」(『汴梁瑣記』 河南人民出版社一九八六所収)。また引用部分の直前には、辛亥革命から五四運動にかけての頃、私塾に『百家姓』『三字經』などを売りに来る負販の本屋が有ったことが記されている。

(20)

『中國出版史料補編』所収。他に阿英の「從清末到解放的連環圖畫」(張靜蘆編『中國現代出版史料丁編下』中華書局一九五九)には清末から民国にかけての連環圖の發展についての記述があり、それによると光緒十年(一八八四)には連環圖の前身である「回圖」が出版され、光緒二十五年(一八九九)に文益書局から朱芝軒の『三國誌』が最初の連環圖として出版された。また連環圖と貸本との関係についても次のように記されている。

租書情況的經過是這樣的。出第一部連環圖畫的文益書局、資力雄厚、有石印機、只出售不出租。後來有姚文海・蔣春記兩家做印、他們繪了十幅圖、立刻付印出版、一天出一本、有時二十多天纔出完。爲着資金的缺乏、他們不可能等出齊再賣。但在出齊前、推銷很不容易、就想出租書的辦法。書攤・書店都可以隨時收到錢週轉。讀書的人、由於租閱價廉、看的人也愈來愈多、後來、書攤就乾脆出租了。

これによると、初めは小規模な本屋が出版の資金繰りのためにバラで貸し出したのが、料金の安さから大流行するようになったようだ。